



Title	「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間への凝視 : 中国集団農業時代における郷土性の変遷
Author(s)	張, 曼青
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2025, 51, p. 131-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100821
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間への凝視

—中国集団農業時代における郷土性の変遷—

張 曼青

目 次

1. はじめに
2. 「郷土中国」からポスト「郷土中国」へ
3. 「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間
4. 郷土性の強まり
5. 郷土改造で薄められた「郷土の色」
6. おわりに

「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間への凝視

—中国集団農業時代における郷土性の変遷—

張 曼青

1. はじめに

「中国社会は、基層から見れば郷土的である。」

これは、中国社会学者・人類学者費孝通が著作『郷土中国（中国語：乡土中国）』の冒頭に記した一文である。この著作で、費は1940年代当時の中国農村の実情に基づき「郷土／郷土性」という概念を提唱している。ここでの「郷土性」とは、農村を基盤とした地域社会の伝統的な生活様式や文化、さらにはその社会の人間関係の特質を指す。「郷土中国」という言葉は、中国社会を研究をしているのであれば誰もが一度は耳にしたことがあるといっても過言ではないほど、広く浸透した代表的な理論である。実際、この内容は中国の高校国語の教科書にも掲載されている。つまり、時代を超えた普遍性を持つことは間違いないだろう。

中国最大の学術サイトCNKI¹⁾で「郷土中国」をキーワードに学術雑誌を検索すると、1900件以上の検索結果が表示される。諸研究のなかで、理論に関する研究もあるが、現在の中国農村に関する事例研究（杜2021）や、近年重点的に推進されている「農村振興」政策と関連付けながら議論する研究（趙2021）は数多く見受けられる。一方で、社会の変化を意識した研究も多く、郷土性の変容が論じられている。「郷土中国」が提起された1940年代以降、中国の郷土社会は土地革命、社会主義改造、人民公社化運動、生産請負制、そして市場経済の浸透といった一連の変革を経験し、農村は大きな変化を遂げたのは間違いない。さらに、1980年代以降の改革開放による急速な近代化と経済的発展に伴い、「郷土中国」の理論も発展を続け、「新郷土中国」（中国語：新乡土中国）や「ポスト郷土中国」（中国語：后乡土中国）といった新しい概念・理論が提唱された。

これらの新しい理論については第2章以降で述べることとする。ここで述べておきたいのは、1980年代以降の農村社会の変容は広く認識されているものの、従来の「郷土中国」と「新／ポスト郷土中国」の間に位置する1950～1980年の集団農業時代における郷土性については、十分に体系的な議論が行われていないという点である。そこで、この時期の郷土性の変遷と、その後の現代社会への影響を再評価することを試みたい。理由の一つは、集団農業時代が郷土性に影響を与えていること、そして1980年代以降

の農村社会とも連続性を持っていることである。もう一つは、筆者のこれまでの研究で、この特殊な時代の出来事が農民の記憶に深く残り、現在の行動や考え方にも影響を与え続けていることが確認されているためである（張 2024）。

したがって、本論文では現代中国農村研究の原点である『郷土中国』に立ち戻り、「郷土性」という概念を再検討し、特に 1950～1980 年の集団農業時代における郷土性の変遷について整理することを目的とする。

具体的には、第 2 章で「郷土中国」からポスト「郷土中国」への社会的転換の過程に基づき、それぞれの理論の特徴を概説する。第 3 章では「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間に位置する集団農業時代の状況を整理し、第 4 章と第 5 章では、筆者自身の調査事例を参照しながら、郷土性の変遷について論じていく。

2. 「郷土中国」からポスト「郷土中国」へ

本章において、中国社会の激変に伴い、「郷土中国」の概念がどのように援用され、発展してきたかを整理してみたい。その中で、最も有力な研究として、賀雪峰の「新郷土中国」(2013) および陸益龍の「ポスト郷土中国」(2017) の二つを挙げることができる。

まず、言及すべきことは、『郷土中国』が具体的な地域におけるフィールドワークに基づいた調査報告ではなく、当時の中国社会構造全体を把握しようとする理念型であるという点である。この点について、費孝通は次のように述べている：

ここで述べられている「郷土中国」とは、具体的な中国社会のスケッチではなく、具体的な中国の基層伝統社会に内包された一種の特有な体系であり、社会生活のあらゆる側面を支配しています。それは、他の体系が同様に中国社会に影響を与えることを排除しているわけではなく、それらの影響も中国の基層社会において作用することがあります。私がいう「郷土社会」という概念を明らかにすることで、具体的な中国社会を理解する手助けとなります。この意味において、概念は物事を理解するための道具なのです。

—費孝通『旧著〈乡土中国〉重刊序言』111 頁より。

無論、費孝通も具体的な中国社会をスケッチした研究を行っている²⁾。ただ、『郷土中国』は、中国農村の現実と西欧の社会学諸理論など吸収して再融合した著作である。本の中で、西欧社会と比較した極めて深い洞察がある。例えば、団体格局と差序格局、法治秩序と礼治秩序などの論述が挙げられる。

だからこそ、『郷土中国』における中国農村の描写が「無時間的」かつ「無空間的」と評される理由（賀 2013）も理解できるだろう。つまり、「『無時間的』とは、費が観察した 1940 年代の農村は、2000 年代以降に起こった大きな変化をまだ経験していない

ことを意味し、『無空間的』とは、費孝通が中国の農村を一つの全体として捉え、理念型として描写しているためである」（賀 2013）。

賀雪峰は、2000年以降に中国で生じた新たな社会変化に基づいて、「新郷土中国」³⁾を提起している。この「新」について、賀自身が書いた「序」によれば、主に以下の点を指している：

- (1) 中国の農村はすでに「熟人社会」ではなく、「半熟人社会」となったこと。
- (2) 村の概念自体も変わり、自然村と行政村の区別が生じたこと。
- (3) 人間関係も理性化し始め、村の統治に関する問題が現れたこと。
- (4) 「制度下郷（制度が農村に浸透する）」、計画出産や「大社員」という概念も生まれたこと。
- (5) 二つの委員会（两委）関係、党と政府の関係、幹部と住民の関係といった新しい関係性も形成されたことなど。

「新」で強調された中国農村の側面は上記の通りである。また近代化政策下の差序格局の変化に着目する研究もあり、「差序格局」に利益の要素が加わったり、社会関係の拡大が生じていると指摘される（花澤 2020）

一方で、「郷土中国」から完全に離脱したわけではなく、各地域の「郷土性」が残り、それがいまだ農業の根幹を支えているという考えから、陸益龍（2017）は「ポスト郷土中国」を提唱している。「新」よりも「ポスト」のほうがより適切であるとされる理由として、『新』には置き換えの意味があり、現在の中国が近代化への社会転換の途上にあるという現状と齟齬が生じる」という指摘がある（陸 2017）。すなわち、変化の一面に注目するだけではなく、基盤となる「郷土中国」という側面を意識することが必要である。特に陸は「家庭農業、村落、親しい人間関係の存在と維持により、農村は依然として郷土的な特徴を部分的に保持しており、完全に都市化した社会には移行していない」と強調している。

また、「無空間的」であった『郷土中国』とは異なり、新郷土中国やポスト郷土中国では具体的な中国の調査地が取り上げられている。例えば、賀雪峰は湖北省を中心に調査を行い、「華中学派」の代表的な研究者である。次章では、これまで焦点を当てられなかった集団農業時代の状況を整理していく。

3. 「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間 —集団農業時代⁴⁾における郷土性の変遷—

第2章でも触れたように、「新郷土中国」や「ポスト郷土中国」で注目されているさまざまな変化は、基本的に市場化が始まった1980年代以降に生じたものである。一方

で、「郷土中国」は1940年代の伝統的な中国農村社会を指している。そうだとすると、「郷土中国」と「ポスト郷土中国」の間に位置する約30年間の「郷土性」がどのように変化したのかわかるとは見えませんが、これは図1である。実際、この30年間における中国農村の郷土性に関する議論は極めて限られており、改めて整理する必要があると考えられる。

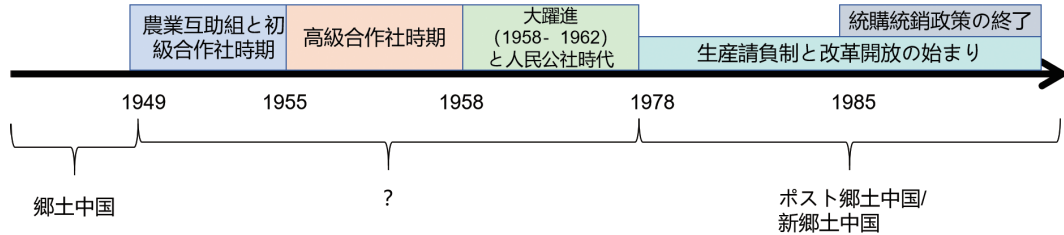


図1 「郷土中国」からポスト「郷土中国」への社会転換（筆者作成）

1949年の新中国建国後から1980年代の改革開放が始まる前の時期は、従来の郷土社会から大きく変化し、1980年代以降の社会とも異なる特別な時期であり、いわゆる「集団農業時代」である。本稿で述べる「集団農業時代」とは、互助組や初級社の創設が始まる1949年から、市場化と生産請負制が導入される1980年代初頭までの期間を指している。この時期において、農村の土地制度や農業経営体制、さらには文化などの各側面に対して「郷土改造」が進められていた（陸2016）。

表1 集団農業時代の郷土改造が農村社会への影響（陸2016）

	改造の内容	改造の影響
土地制度	地主所有制⇒小農所有制 ⇒集団所有制	土地公有制の確立に伴い、郷土中国の制度基礎が変化した
農業経営体制	家庭経営⇒集団化経営、 合作社・生産小隊・生産 大隊などの組織	国家の統制力が村落に浸透することにより、村は「地方性」から「公共性と政治性」へ変化した
文化・思想	「破四旧」や「文革」 ⁵⁾ など	郷土中国における伝統文化、慣習や習俗、信仰などは一時期衰退した

郷土中国における「郷土性」は、社会主体の非流動性、社会空間の地方性、そして社会関係の馴染み性という三つの側面を持っている（陸2017）。一連の改造を経て、中国農村社会は1940年代と比較して大きく変化している。ここでは、前述した三つの側面から、郷土性がどのように変わったのかについて述べたい。

まず、流動性の面について見ると、1949年の新中国成立以降、農業集団化時代においても同様に非流動的な社会が維持された。これは、1958年に『中華人民共和国戸籍登記条例』が施行され、戸籍制度⁶⁾が正式に導入されたことに関係している。農村部に固定された農民は、職業や居住地の移動が厳しく制限されており、従来の郷土中国にお

ける農民が土地に縛られていた状況が、制度によってさらに強化されたと言える。

次に、社会空間の地方性についても大きな変化が見られる。村落は単に地方性を持つだけでなく、表1に示されるように、合作社、生産大隊、生産小隊といった制度が確立されることで、国家の統治力が各村落に浸透した。当時の末端リーダーである生産隊長は、通常、村落や宗族内で権威のある人物が務めていた。これにより、村落の社会空間の地方性が変化し、陸の言葉を借りれば、「村落は地方性から公共性と政治性へと移行し、政治活動が村落社会活動に広く浸透した」と言える（陸 2009）。

最後に、社会関係の馴染み性（「馴染み関係」）については、集団農業時代において従来よりも強まった。特に1958年以降はその傾向が顕著である。一つ目は、戸籍制度によって流動性が抑えられた結果、農民同士が根本から知り合っている（「知根知底」）という状態が続いたことである。二つ目は、農民の日常生活や農業生産、村のインフラ整備などがすべて人民公社制度に大きく規定されていたことである。人民公社の「三級所有、隊を基礎とする」という方針に基づき、生産小隊が共同生産と利益配分の単位となっていた。この「隊」は生産隊のことであり、生産隊は運命共同体として機能し、共同の農業生産活動を通じてメンバー同士の相互理解と親密さがさらに深まった。また、人民公社期以降、戸籍制度や配給制度により都市と分断され、農村は政府から経済的支援や保護を受けることができず、すべて「自力更生」のガバナンスが求められた。このため、村の農地整備や水利なども農民の共同労働によって進められた（田原 2019）。こうした背景のもと、社会的つながり⁷⁾のみならず、まとまりにおいても馴染み関係の強化がみられたのではないかと考える。

4. 郷土性の強まり

—「我们家的人」という言葉からみる農業集団時代の馴染み関係—

農業集団時代の馴染み関係について、本節で改めて整理していきたい。

筆者が中国農村でインタビュー調査を行う際、「私たちの家の人」（中国語：「我们家的人」、以下「私たち」と略す）という概念にしばしば触れている。これは村落における境界意識を表しており、単に地理的な境界だけでなく、誰を「私たち」の一員として認めるかという社会的な境界を意味している。この境界は、差序格局における「己」を中心とした波紋の広がり为例える比喩で一般的に説明されるが、では「私たち」という「円」はどのように描かれるのだろうか。

筆者が長年中国安徽省南部で行ってきた現地調査⁹⁾をもとに、図2イメージ図を作成してみた。右側の写真の水色部分で示している「私たち」の範囲は、文脈によって家族、宗族、生産隊（生産小隊・村民小組）を指している。生産隊は調査地で自然村とほぼ一致しており、自然村のなかには家族や宗族も存在するが、異姓村のなかで血縁がつながっていないケースは普遍的である。血縁関係・婚姻関係を一切持たない同一生産隊の元生

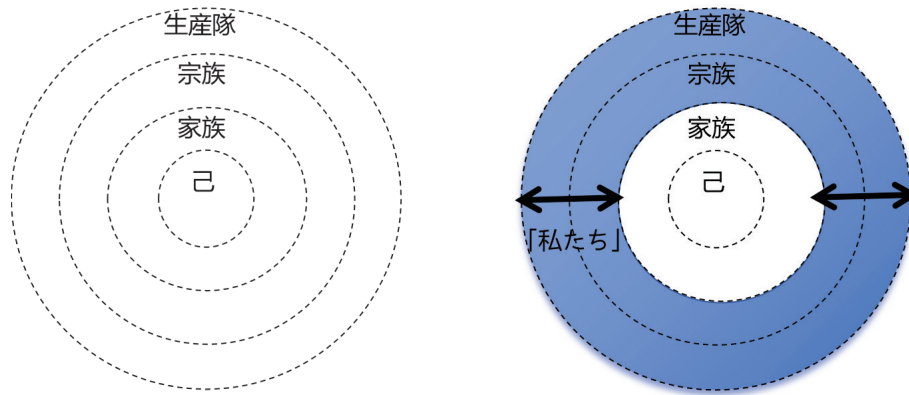


図2 「私たち」のイメージ図⁸⁾

産隊員までが「私たち」と認識されることがある。調査中、以下のような言葉が聞かれた：

- 彼は私たちの家の人、同じ隊の人… (70 女性)
- (ある人に言及するとき) 私たちの隊の人だ… (70 代男性)
- あの時、一緒に生産隊で働いていたときに知り合った。生産隊では一緒に牛を放したり、牛の糞を拾ったりしていた… (50 代女性¹⁰⁾)

生産隊での共同労働は、その時代の集合的記憶として共有され、現在でも「生産隊／隊」という言葉は社会関係を表現する際に普通に使われている。生産隊内の最も遠い関係の人でも「私たち」として認識されていることから、この時代の日常生活に浸透した共同活動が、生産隊内の結束性を強め、馴染み関係もさらに強化されていることがわかる。

さらに、筆者の他の調査事例から、集団農業時代における馴染み関係が、実際には時代を超えて今でも農業生産に影響を及ぼしていることが示された。たとえば、畜産業が規模を拡大した後に発生した廃棄物の問題において、一部の畜産業者は畜産・耕種主体間の「知根知底」に由来する馴染み関係を活かして、畜産廃棄物を肥料資源として農地に還元することができている（張 2019）。この事例では、同じ生産隊だった人々が相互に畜産や農地の状況を熟知したうえでの連携が実現している。

5. 郷土改造で薄められた「郷土の色」

郷土中国は、中国基層社会の構造を抽出した理念であるからこそ、「郷土性」そのものは農村社会の各要素が絡み合い、影響し合う非常に複雑なものである。馴染み関係の面から、集団農業時代の郷土性の一面は明確に見えるが、郷土性の弱まりも実際に発生している。この点については本章で詳しく展開していく。陸 (2016) の言葉を借りれば、



図3 2011年に新しく製造された土地神の祭壇（筆者撮影）



図4 「功德碑」に記載された名前と日付（筆者撮影）

集団農業時代において「郷土改造運動は郷土の色を薄めた」と述べられている。

具体的には、郷土性が「薄められた」要因を以下の郷土文化の衰退と礼治から基層制度への移行という二つの事例から論じていく。

5.1 郷土文化の衰退—「土地信仰」を事例に

「破四旧」と文革政策により、多くの伝統的な習慣や祭り、文化活動が禁止または削減されたため、農村の民間信仰はその時期に基本的に表に出せなくなった。たとえば、中国で広く見られる土地信仰もその一例である。当時、土地神社や祭壇などはすべて取り除かれ、信仰自体は「地下」に移行せざるを得なかった。現在、中国の田んぼや畑では土地神の祭壇を見ることができるが、ほとんどは改革開放以降、地元の村民が共同で資金を集めて再建したものである。

土地神のような地域の神は、各地で異なる名称、形象、祭祀習慣を持っている。しかし、この地方信仰が中断された結果、建物の建設様式や祭りの方法など、地域性の特色は大幅に薄れてしまった。例えば、新しく製造された土地神の祭壇はすべて、図3の写真に写るような建物と全く同じ様子である。参拝のやり方については、地域の長老から聞いて再現することで学んでいるところもあり、それを知る長老がいない地域では他地域から借りることになる。

また、筆者の調査地である安徽省南部の農村において、祭壇が取り除かれた後にそのまま再建できていない村も存在する。このように、地方信仰や活動が途絶えた恐れがある。中国の土地廟の影響範囲は生産隊といった狭域的なものであり、共同性や精神的なつながりを形成していたが、地方信仰習慣の中断とともに、そのようなつながりも断たれてしまった。ここでいう土地信仰はあくまで地域の文化活動・共同活動の一例に過ぎず、これ以外にも似たような郷土文化の衰退現象が広く存在するに違いない。

5.2 礼治から基層制度へ

前述の通り、『郷土中国』では、中国と外国との比較に関する論述が行われており、礼治と法制は非常に典型的な例である。

伝統的な礼治社会においては、国家の影響力が末端の農村に浸透することは難しく、村落は主に内部の礼儀や慣習に依存して秩序を維持していた。しかし、土地革命から人民公社時代にかけて、国家はさまざまな政治運動や制度改革を通じて権力を農村社会に徐々に浸透させていった。特に「政社合一」の人民公社の時代には、生産隊や合作社などの制度が経済生産だけでなく、国家統治の基本単位ともなっていた。人民公社や生産大隊、生産小隊を代表とする基層組織体系は、国家が農村に浸透するための重要なメカニズムであり、人民公社の時代には村の生産活動や生活管理、分配制度は公社およびその下部組織によって一元的に管理されていた。この制度は集団化と計画経済を通じて、従来の村落の組織方式を変え、国家権力がこれらの基層組織を通じて農村社会の管理に直接関与することを可能にした。

改革開放および家庭生産責任制の導入後も、集団経済時代の基層管理の一部のモデルや機能は継承され続けた。生産小隊は村民小組に、生産大隊は村民委員会に、人民公社は镇政府（郷政府）に改編され、さらに生産隊の隊長は村民小組の組長へと移行した。このように、国家の統制力が村落に浸透することで、村は「地方性」から「公共性と政治性」へと移行した。

国家の基層治理制度が強化されるにつれて、伝統的な礼治秩序は徐々に衰退していく。村落における道徳的権威者、例えば長老や宗族のリーダーの影響力は弱まり、地方の儀式や慣習はもはや社会秩序を維持する主要な手段とはならなくなった。集団経済と政治権力の集中は、個人や家庭の独立性を低下させ、村民間の社会関係は伝統的な血縁や親族関係ではなく、生産や分配といった現実の利益に基づくつながりへと移行した。集団農業の時代における国家制度の浸透によって、礼治そのものの影響力も次第に低下していった。

ただし、これは相対的なものであり、現在においても礼治は依然として一定の役割を果たしている。礼治においては、道徳や倫理がしばしば実際の争いごとにおいて重要な役割を担っている。郷土中国において、村の長老や知識人は道徳的権威を持ち、社会の秩序を守る役割を果たしている。法的な強制力ではなく、村落共同体内の合意や儀礼的行動によって秩序が保たれてきた。たとえば、生産隊の隊長が村民小組の組長を担うことがある¹¹⁾。組長は多くの場合、村民の中で威望を持つ人物であり、村民小組内のトラブルを調停したり、土地や家庭、隣人との間の矛盾を解決したりする役割を担っている。したがって、集団農業時代の国家の統治力の浸透は、現在の基層治理制度の基礎をある程度築いたものであったと理解できよう。

6. おわりに

本論文では、中国社会学者費孝通の理論である「郷土中国」とその後の「新郷土中国」や「ポスト郷土中国」について、特に1950～1980年の集団農業時代における郷土性の変遷に焦点を当てて再評価を試みた。集団農業時代は、土地制度や農業経営体制の変化を通じて、農村社会の構造や人々の関係性に大きな影響を与えた。

この時期、戸籍制度の導入や人民公社の設立などにより、農民の流動性は制限され、共同作業を通じて親密な関係が強化され、この側面において郷土性は維持され、さらには強化される。さらに、「私たち」という意識の形成にも影響している。生産隊での共同作業が集団的記憶として残り、現在の農業生産にも影響を及ぼすことが示された。これにより、集団農業時代の郷土性が現代農村社会に与える影響の重要性が浮かび上がった。一方で、ガバナンスの側面や文化の側面においては、一定の弱まりも見られた。

振り返ってみると、集団農業時代は、中国の農村社会における特殊な時代であり、その影響は現在もなお深く根付いている。現在ないし将来中国の農村を理解するためには、この集団の時代をじっくりと凝視ことは不可欠である。

注

- 1) <https://chn.oversea.cnki.net/kns/defaultresult/index> (2024年9月30日アクセス)
- 2) 例えば、『江村経済』などが挙げられる。費孝通『江村経済』(戴可景訳) 商务印书馆
- 3) 『新郷土中国』は2003年に初版が刊行され、その後、賀とその研究チームは観察した中国農村の社会変容をもとに内容の修正・追加を行い、2013年に修正版が出版された。
- 4) 誤解を招かないように、本稿では「集団農業時代」を「農業集団化」時期(1949～1958)、「人民公社時代(1958～1980年代初頭)」を区別して用いることとする。
- 5) 「破四旧」は、中国の文化大革命(1966～1976年)初期に展開された政治運動で、「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」の四つの古いものを破壊することを目指しました。伝統的な思想や宗教、文化遺産、風俗習慣が「封建的」「資本主義的」「反革命的」と見なされ、全国で歴史的建造物や文化財、寺院、宗教施設が破壊され、書籍の焼却も行われた。古い生活習慣や儀式、服装、個人の信仰も批判され、特に儒教や仏教などの伝統的価値観が否定された。この運動は社会に深刻な影響を与え、多くの文化遺産や伝統的知識が失われ、社会基盤に大きな変革をもたらしている。
- 6) 1958年に正式に導入された戸籍制度は、都市と農村の住民を明確に分ける仕組みを確立した。中国国民は都市戸籍と農村戸籍のいずれかに登録され、居住地や職業、

社会福祉が厳格に制限されることになった。都市戸籍を持つ者は、都市部での就労、教育、医療などの社会福祉を受けることができました。農村戸籍を持つ者は、農村部に定住し、農業に従事することが義務づけられ、都市への移動は厳しく制限されました。この制度は、農村から都市への急激な人口流出を防ぎ、都市の食糧供給や労働力のバランスを保つために導入された。中国の急速な工業化にも寄与していた。しかし、この戸籍制度は、都市部と農村部の間に大きな経済的・社会的格差を生む結果となった。

- 7) 田原 (2019) は農村におけるガバナンスを「生態領域・象徴領域」と「つながりベース・まとまりベース」の2つの軸で整理している。生態領域は水利や道路など、物質的な生活環境の整備に関連するものを指し、象徴領域は埋葬や寺廟の建設など、精神的・文化的な生活面に関わるものを意味する。つながりベースは血縁や集落など、規模が小さく親密な関係に基づく内部的な結束を指し、まとまりベースは行政村など、より広範な共同体を基盤とした結束を表す。
- 8) 差序格局は実際、その人の経済的状況や地位などにより同心円の配置や大きさは異なるが、ここでは分かりやすくするために、あくまでも一般的な例を示している。
- 9) 実際の調査地の詳細と生産隊に関する調査内容は、拙稿の張ら (2023) にまとめている。
- 10) 被インタビュー者は1970年生まれで、生産隊の時代にはまだ子供で、牛を放したり牛の糞を拾ったりするような軽い仕事を多く担っていた。
- 11) 現在村民委員会では大学卒の若者が増えており、村民委員会の人員の若返り現象も見られる。

引用文献

<中国語>

- 费孝通 (1985) 《乡土中国》生活·读书·新知三联书店
 —— (2007) 《江村经济》世纪出版集团上海人民出版社
 —— (2020) 《旧著〈乡土中国〉重刊序言》，第 III 頁
- 贺雪峰 (2013) 《新乡土中国》北京大学出版社
- 陆益龙 (2016) 后乡土性：理解乡村社会变迁的一个理论框架 《人文杂志》2016 年第 11 卷, 106–114 頁
- 陆益龙 (2009) 中国农村社会阶级阶层结构 60 年地变迁：回眸与展望, 《马克思主义与现实》2009 年第 6 卷, 145–150 頁
- 陆益龙 (2017) 《后乡土中国》商务印书馆
- 赵艳 (2021) 从“乡土中国”到“后乡土中国”：民俗文化在乡村振兴战略中的资源价值 《青海社会科学》2021 年第 2 卷, 100–104 頁

<日本語>

杜安然 (2021), 「中国農村研究における『差序格局』概念の適用の試み：重慶市一『新農村』における祝賀会の内在的検討」, 熊本大学大学院社会文化科学教育部編『熊本大学社会文化研究』19, 145-163 頁

田原史起 (2019), 『草の根の中国』, 東京大学出版会

張曼青・胡毓瑜・三好恵真子 (2023), 「新中国建国後の肥料農法の漸進的な転換と農民の主体性—『土化肥』の使用を基軸とした考察—」, 日本村落社会学会編『村落社会研究ジャーナル』29(2), 13-24頁

張曼青・胡毓瑜・三好恵真子 (2019), 「『ポスト郷土中国』における養豚廃棄物処理の課題と展望：安徽省南部の事例における郷土性の継承及び農業実践からの再考—」, 日本生活学会編『生活學論叢』35, 31-46頁

花澤聖子 (2010), 「近代化政策下における中国農村社会の『差序格局』」, 神田外語大学編『神田外語大学紀要』22, 31-52 頁

**Between *Rural China* and *Post-Rural China*:
The transformations of local identity during China's collective agricultural period**

Manqing ZHANG

This study reevaluated the theory of Rural China by Chinese sociologist Fei Xiaotong (*From the Soil*), along with its subsequent iterations, New Rural China and Post-Rural China. The study's particular focus was the transformation of local identity during the collective agricultural period from 1950 to 1980. The collective agricultural period had a profound impact on the structure of rural society and people's relationships through changes in land-tenure systems and agricultural-management structures.

During the collective agricultural period, the introduction of the household-registration system and the establishment of people's communes restricted the mobility of farmers, while collaborative labor reinforced intimate relationships. In these ways, local identity was maintained and even strengthened. This period of time also contributed to the formation of a sense of "we." Collective labor in production teams left a mark, as collective memory, affecting current agricultural production. The study highlighted the important impact of local identity established in the collective agricultural period on contemporary rural society, as well as signs of weakening aspects of governance and culture at that same time. (177)

Key words: rural China; new rural China; post-rural China; collective agricultural period